

バラの品種の違いと日持ち性

大塚紀夫・江口順子<sup>1)</sup>・辻 聡宏・中山裕介  
(佐賀県農業試験研究センター・<sup>1)</sup> 東松浦農業改良普及センター)

Norio Ootsuka, Junko Eguchi, Toshihiro Tsuji and Hirosuke Nakayama :  
The difference of longevity of cut rose by cultivars

バラは品種数が多く、実際に栽培されている品種数も極めて多い。花の大きさ、色、咲き方等変化に富んでおり、栽培特性だけでなく日持ち性にも品種差が大きいことが推察される。一方、消費者は花に対しては「ちゃんと開いた後で枯れるべき＝「寿命の全う」」が当然との考えを持っている。

そこで、品種の相違と日持ち性と咲ききり性（観賞終了までの展開程度）について検討した。

1. 材料および方法

2002年11月21日に収穫したバラ122品種を供試した。花は、収穫の翌日と3日後に水切りし、以後は水道水の補充のみとした。照明と温度は成り行きとし、収穫後20日間の平均室温は17.3℃であった。糖分析は、花卉 (St) または花器 (Sp) を乳鉢で搗り潰し0.45μmのメンブレンフィルターで濾過し、HPLC (カラム :Shodex SUGAR SP0810) で行った。なお、収穫翌日から2日間は鮮度保持剤 (エバーローズ) を使用した。

2. 結果および考察

観賞日数はスタンダードタイプ (st) は4～23日、スプレータイプ (sp) は7～23日で、ともに11～14日が最も多く平均もほぼ同じである。観賞終了の理由は、露芯後の萎凋等と展開中途での萎凋等がそれぞれ半数近い。観賞終了理由の違いと観賞日数は、stでは露芯後の萎凋

と展開途中の萎凋では観賞日数に差はないが、spでは咲ききり後の萎凋より展開中途での萎凋が観賞日数はやや長い (第2表)。観賞終了時の開花程度を比較すると、露芯まで咲ききるものはstは25%, spは38%で、開花程度6以上で開花が良好なものは半数強の55%, 56%, 開花程度5未満の開花が十分ではないものは共に3割程度、開花程度4未満で殆ど展開しないものもあった (第1表)。

糖は、花卉の展開、水揚げ、花卉の肥大、花色発現等を促進し、採花時の糖濃度が高い品種は日持ち性が高いとされてきた。花卉 (器) 1g当たりの糖含量は、stとspに関係なく品種差が大きい10～20mgが多く、平均は19.1mgと12.8mgである。採花翌日の糖濃度と観賞日数や終了時の開花程度との相関は認められず、展開中途での萎凋するものと露芯まで展開する花で糖濃度に差はなかった (第2表)。

以上のことから、バラはstとsp共に日持ち性と咲ききり性には品種差が極めて大きいことが明らかとなった。また、展開中途で萎凋する主な原因は糖分不足ではなく、花卉の糖濃度は日持ち性や咲ききり性を決定するほどの要因ではない。このため、切りバラの日持ち性向上には、日持ち性が良好な品種の選定と収穫後は吸水能の低下を抑制して萎凋を防止することが最も重要と考えられる。

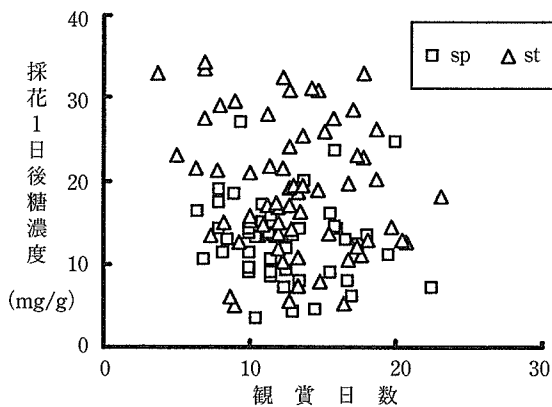
第1表 観賞日数と観賞終了時の開花程度

観賞日数	観賞終了時の開花程度				
	>3	<4	<5	<6	<7
5未満			1		
～8	1	1	1	1	3
～11	1	2	1	3	3
～14	1	1	5	6	9
～17	2	2	5	3	1
～20		2	5	3	1
～23	1				1
23以上			1	1	

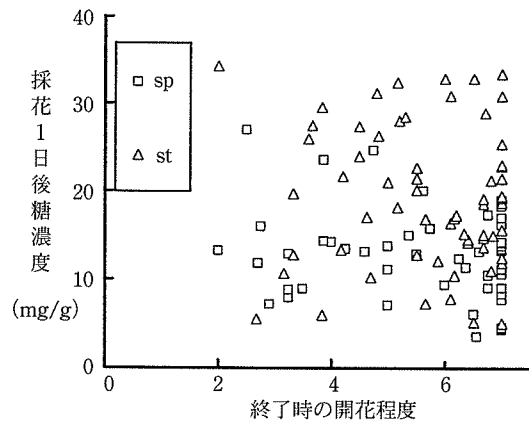
第2表 萎凋の違いと花卉の糖濃度 (mg/新鮮物1g)

萎凋の時期	観賞日数				平均
	11≤	14≤	17≤	20≤	
St 露芯後	19.4 (9)	15.8 (11)	13.7 (3)	11.4 (4)	16.1 (27)
展開中	14.9 (8)	14.5 (12)	14.2 (7)	19.4 (9)	15.8 (36)
Sp 露芯後	13.5 (10)	21.4 (8)	18.9 (2)	— (0)	12.8 (20)
展開中	13.2 (4)	12.0 (8)	12.1 (6)	18.5 (3)	16.2 (21)

注) a) 展開中はブルーイングとベントネックを含む。  
b) ( ) 内の数字は品種数。



第1図 花卉の糖含量と観賞日数



第2図 花卉の糖濃度と開花展開